（史料紹介）眼科医酒井利泰の横浜における記録（二）

―明治８・９年の西洋医学修業に関して―

塚　本　弥寿人

はじめに

みよし市福田町にて代々眼科医を営んできた酒井家。その12代利泰が、横浜において明治８年（1875）４月から９年（1876）５月にかけて行った西洋医学修業について、筆者は『愛知大学綜合郷土研究所紀要』第59輯と第61輯にて、書簡と記録の紹介を行ってきた[(1)]。本稿はその続きである。

翻刻

「襍費録」（酒井家文書Ⅱ－2－5のうち）
（表紙）

襍費録

（見返し・１丁オモテ・１丁ウラ　白紙）
（２丁オモテ）

記

十月一日
一　十五錢　牛肉
二日
一　三拾八錢五厘　柳川拂
〃
一　五錢　氷湯錢
四日
一　拾五錢五厘　酒肴漫
五日
一　五錢　醬油
〃
一　拾五錢八厘　漫
六日
一　十錢　蚊帳
六日
一　三十錢　シヤモ
（２丁ウラ）
〃
一　壹圓八錢三厘　松風（カ）
〃
一　貳錢　とこや
七日
一　十九錢　牛肉
〃
一　廿五錢　解剖入費
八日
一　十錢　麥酒
〃
一　十錢　郵便印紙
〃
一　拾貳錢五厘　人力
〃
一　五錢　バース
七日
一　壹圓五十貳錢　山本送別
（３丁オモテ）
八日
一　拾貳錢五厘　漫
〃

一　三圓　夜具三枚
〃
一　拾貳錢五厘　緒方進物
十日
一　十錢　ツケ物
〃
一　拾貳錢五厘　煙草
十二日
一　三十錢　半紙　葛紙
筆
〃拾
一　六錢五厘五毛　鶏肉
十三日
一　拾四錢貳厘五毛　〃
十四日
一　七拾四錢　老母拂
（3丁ウラ）
十六日
一　拾八錢八厘三毛　牛
十七日
一　壹朱　斬髪
〃
一　五錢　湯錢
十八日夜
一　拾七錢五厘　劇場
〃
一　三拾壹錢貳厘五毛　病理畧論
二
十九日
一　七錢五厘　スシ
廿日夜
一　拾貳錢五厘　菓子
廿二日夜
一　八拾五錢七厘七毛　江馬君
送別
廿四日
一　五錢　浴湯
（4丁オモテ）
廿七日
一　七拾貳錢七厘五毛　柳川拂
〃
一　十錢　菓子
廿九日
一　廿八錢　鰻店
三十一日
一　五錢　バース
一　貳圓七十五錢　月俸月謝
〆金拾四圓四十三錢九厘
十一月一日
一　三十三錢三厘　野毛
酒客
四日
一　七拾三錢　中屋拂
其他
七日
一　三十一錢三厘　野毛
料理
（4丁ウラ）
八日
一　拾貳錢五厘　筆
〃
一　五十錢　馬(カ)馳
小遣
九日
一　七錢　バース
十一日
一　三十錢　下駄
十三日
一　廿五錢　ヘボン行
中食
〃
一　十貳錢五厘　炭
十四日
一　廿五錢　柳川拂
〃
一　三十三錢　時辰
質出シ
（5丁オモテ）
〃
一　十貳錢五厘　小遣江

志し

十五日
一　拾貳錢五厘　劇場
十七日
一　廿貳錢　薮そば
廿一日
一　十貳錢　鶏卵
廿四日
一　廿貳錢五厘　沢村
〃
一　十錢　トコヤ
五回
廿五日
一　廿五錢五厘　柳川
拂
廿七日
一　十貳錢五厘　斬髪
廿九日
一　拾貳錢五厘　炭
[（ムシ）]
一　拾八錢七厘五毛　湯錢
（5丁ウラ）
三十日
一　四十五錢四厘　蕎麥拂
〃
一　貳圓七十五錢　月俸月謝
〃
一　廿五錢　瀉眞（ママ）
〃
一　十錢　小遣へ志シ
〆八圓四十九錢七厘五毛
三日
一　十錢　筆五本
〃
一　廿四錢　界紙二百枚
〃
一　廿錢　足衣
〃
一　六錢五厘　打ヒモ
（6丁オモテ）
四日
一　三錢　小遣
五日
一　六錢貳厘五毛　菓子
六日
一　五錢五厘　持込賃
七日
一　拾四錢五厘　足衣
八日
一　貳錢　郵便
〃
一　三十三錢五厘　薮そば
九日
一　廿五錢七厘　丸□
〃
一　貳錢　トコヤ
十日
一　廿貳錢三厘四毛　蕎麥
[（ムシ）]
一　六十錢　ヱリ巻
（6丁ウラ）
〃
一　八錢五厘　伊せ山
十三日
一　七錢五厘　同
十五日
一　十七錢五厘　薮そば
〃
一　八錢五厘　伊せ山
十六日
一　貳錢　とこや
〃
一　六十貳錢五厘　梅やしき
十七日
一　十八錢一厘五毛　同
十八日
一　廿三錢三厘三毛　蕎麥
廿二日
一　三圓　半合羽
廿三日

一　四錢　トコヤ
廿五日
一　五錢五厘　持込賃
（7丁オモテ）
〃
一　貳錢　卵紙（ママ）
廿七日
一　五圓　解剖入費
　　并ニ器械
廿八日
一　十九錢五厘　丸□
〃
一　五十三錢三厘　高印
廿九日
一　貳錢　トコや
三十日
一　四百文　炭
〃
一　九十六錢三厘四毛　なかや
　　拂
〃
一　四十七錢〇五厘　薮麥
　　拂
〃
一　壹圓也　ばあさん
　　拂
〃
一　十錢　鶏卵
（7丁ウラ）
〃
一　三圓五十錢　衣
〃
一　十四錢五厘　足衣
〃
一　十貳錢五厘　小遣へ
　　志し
〃
一　十二錢五厘　ハースへ
　　祝義
〃
一　四十錢　丸□
〃
一　三十七錢五厘　バース
〃
一　六錢貳厘五毛　ばゝへ
　　祝義
〃
一　廿錢　夜具利
三十一日
一　九十一錢　酒肴其外
〃
一　貳圓七十五錢　月俸
（8丁オモテ）
〆貳拾三圓九十四錢四厘七毛
（8丁ウラ）
明治九年一月
一　壹圓也　酒肴其他
〃
一　壹圓也　生理新論
三日夜
一　六十錢　酒代
五日
一　八十錢　小遣
七日
一　三十六錢　物理階梯
〃
一　十錢　伊勢
十日
一　廿三錢五厘　梅やしき
十二日
一　六錢貳厘五毛　伊勢山
（9丁オモテ）
十六日
一　十錢　劇場
十七日
一　壹圓　時計利
〃
一　拾八錢七厘　夜具
　　損料
廿二日

一　十錢　同料
〃
一　十錢　同利
〃
一　六錢貳厘五毛　車代
〃
一　拾一錢七厘　夜具代
廿三日
一　廿九錢　東京□
〃
一　六錢五厘七毛　小林
（9丁ウラ）
廿四日
一　三十三錢三厘　海老
廿六日
一　貳十錢　同
〃
一　八錢三厘三毛　人力
廿八日
一　八錢三厘三毛　海老
廿九日
一　十錢　〃
〃
一　六錢貳厘五毛　人力
三十日
一　十九錢　牛店
〃
一　卅六錢六厘　小林
〃
一　六錢六厘六毛　〃
〃
一　十六錢六厘　酒肴
（10丁オモテ）
〃
一　五十錢　時計
三十一日
一　十六錢貳厘五毛　會□（ムシ）拂
〃
一　三圓七十五錢　月俸
〃
一　三十七錢五厘　湯屋
〃
一　貳圓七十七錢　中屋
〆拾五圓三拾八錢八厘九毛
二月一日
一　廿五錢　小林
一　七錢五厘　海老
十日
一　四錢　トコヤ
十二日
一　壹圓也　定兵衛江
馳走
（10丁ウラ）
廿一日
一　壹圓三十錢　二葉
牛店
廿一日
一　壹圓八十五錢貳厘五毛　東京行
小遣
廿二日
一　五拾錢　シヤツ
〃
一　九十錢五厘　おばさん
拂
〃
一　拾七錢　海老
〃
一　十一錢　郵便
廿三日
一　三圓也　中屋拂
〃
一　七拾五錢　湯屋拂
〃
一　五十三錢貳厘五毛　酒肴
（11丁オモテ）
〃
一　拾三錢五厘　烟草
廿四日
一　貳圓七拾五錢　月俸
廿五日

一　四十五錢　別盃
　　金子氏
〃
一　四十四錢　紙
廿七日
一　六錢貳厘五毛　斬髪
　〆
三月四日
一　廿錢　印紙
九日
一　壹分壹朱　酒肴
〃
一　四十錢　マカナイ拂
（11丁ウラ）
〃
一　四圓廿五錢　内科摘要
十日
一　七拾壹錢五厘　□邨
　　別盃
十一日
一
十五日
一　五十錢　瀉眞（ママ）
廿日
一　五十六錢　ℓ（グレーン）秤
〃
一　廿五錢　書畫帖
一　五圓也　眼器械手付
一　七圓　器械
一　十五錢　足衣
（12丁オモテ）
一　三十一錢五厘　手拭
　　下駄
一　四圓四十八錢　本五部
一　三圓八十五錢　東京行
　　諸入費
一　五十六錢五厘　瀉眞（ママ）
　　二度
三十一日
一　三十七錢貳厘五毛　湯屋
〃
一　貳圓七十五錢　月俸
一　拾八錢七厘五毛　紅葉ばし
　〆
四月一日
一　廿五錢ト　瀉眞（ママ）
　　壹朱
（12丁ウラ）
〃
一　廿一錢四厘　ヘボン行
　　小遣
〃
一　十貳錢　海老
四日
一　壹圓五十錢　帯
六日
一　壹圓五十九錢七厘　中屋
七日
一　貳圓廿五錢　〃
九日
一　拾五錢　劇場
十二日
一　三拾五錢　赤樽（カ）宅
　　ヲゴリ
十六日
一　拾貳錢　上草覆
廿二日
一　三十四圓九拾三錢　眼器械
　　其他
（13丁オモテ）
〃
一　三圓五十錢　煙管
廿三日
一　壹圓五十錢　コーモリ
〃
一　壹圓廿五錢　煙草入
廿四日
一　四十錢　見止印
〃
一　拾五圓　時辰

廿五日
一　六圓三十五錢　東京行
　　雑用
〃
一　五十錢　下駄
三十日
一　壹圓廿五錢　藥
〃
一　廿錢　牛
(13丁ウラ)
〃
一　廿錢　瀉眞（ママ）
〃
一　拾五錢　瀉眞懸（ママ）
〃
一　廿錢　郵便賃
　　通運持込賃
〃
一　十錢　細引
〃
一　拾一錢　檢尿要訣
一日
一　三十七錢五厘　ハスリン（カ）
〃
一　六錢　診筵雑記
〃
(14丁オモテ)
五月二日
一　七十錢　煙草入
〃
一　三十錢　車
〃
一　七十錢　別盃
〃
一　貳圓五十錢　おはさん
　　拂
一　壹圓　荷物賃
一　三十錢　松公ニ祝義
一　貳圓廿錢　下駄
一　廿錢　麥店拂
一　廿錢　切手
(14丁ウラ)
一　三圓廿五錢（ムシ）　蒸氣代
一　廿錢　中屋へ
　　祝義
一　貳圓七十五錢　會計
　　本ハシ代
一　三拾八錢五厘　舟賃ヒゲ
　　松井人力代
一　八十五錢　神戸小遣
　　氣車代入（ママ）
五日六日七日八日
一　壹圓五十錢　五日ゟ八日迄坂府
　　小遣
一　廿錢　懐中
九日ゟ十一日迄
一　廿五錢　シヤツ
(15丁オモテ)
〃
一　廿五錢　指鐶
〃
一　四錢五厘　瀉眞（ママ）
〃
一　五錢　ヱリ
一　五十六錢七厘　諸費
十二日
一　拾貳錢　天ブラ
　　シルコ
一　八錢　瀉眞（ママ）
十三日十四日
一　五錢五厘　シヤツ襟
　　ボタン
〃
一　三十三錢三厘　川蒸氣
〃
一　壹圓十一錢三厘　石嘉拂
一　三十一錢五厘　入費
十五日
一　六十錢五厘　諸入費
〃

一　三圓三十錢　着物
（15丁ウラ）
十六日
一　四十五錢五厘　小遣
十七日
一　壹圓五十錢　煙草入
紙入
〃
一　七拾貳錢　小遣
十八日
一　廿一錢貳厘　小遣
〃
一　五十錢　袋二ツ
十九日
一　壹圓三十錢　三條
宿料
〃
一　八拾五錢　別盃
〃
一　廿錢　三條
宿料
廿日
一　十七錢　三條
酒肴
（16丁オモテ）
〃
一　十八錢　〃宿
〃
一　拾八錢　西京ゟ
大津迄人力
〃
一　五錢　蒸氣并ニ
茶代
〃
一　三錢　草津迄
人力
〃
一　六錢貳厘五毛　茶代
〃
一　廿錢　宿料
廿一日
一　廿□（ムシ）錢五厘　草津ゟ土山
迄人力
〃
一　十錢　石部酒肴
料
〃
一　五錢　水口土山坂ノ下
關　茶代
（16丁ウラ）
〃
一　六錢貳厘五毛　土山支度
〃
一　拾六錢貳厘五毛　坂ノ下ゟ龜山
人力代
〃
一　廿錢　宿料
廿二日
一　十錢　龜山ゟ
石藥師迄車
〃
一　十貳錢五厘　同所ゟ四ヶ市
迄人力
〃
一　六錢貳厘五毛　四日市支度
〃
一　六錢貳厘五毛　菓子代
〃
一　六錢貳厘五毛　冨田酒代
〃
一　十七錢　四日市ゟ桑名
迄車
〃
一　六錢貳厘五毛　茶代
（17丁オモテ）
〃
一　廿錢　宿料
廿三日
一　八錢　舟賃
〃

一　十貳錢五厘　　宮中食
〃
一　三錢　　人力
〃
一　十錢　　茶代
〃
一　十九錢三厘　　足衣
〃
一　壹圓九十錢　　煙管四本
　　同筒
〃
一　十五錢　　足衣
〃
一　拾貳錢　　瀉眞三枚（ママ）
〃
一　五十五錢　　下駄
（17丁ウラから34丁ウラまで　白紙）
（35丁オモテ）
一月廿八日
一　壹圓　　二葉
（35丁ウラ・36丁オモテ　白紙）
（36丁ウラ）
拾　十四四三九
十壹
一　十五三八八九
十　　十四四三九
十一　八四九七五
十二　二三九四四七
一　　一五三八八九
（裏表紙見返し・裏表紙　白紙）

「餞別人名記」（新出文書 3-178）
（表紙）
明治八年
餞別人名記
亥四月下旬
（１丁オモテ）
一　温飩五枚　　〇清四郎
廿六日
一　廿五錢　　〇新造
廿七日
一　廿五錢　　〇市三郎
廿七日
一　温飩貳枚　　〇半七
廿八日
一　同　貳枚　　〇半六
（１丁ウラ）
〃
一　手拭壹　　〇甚太郎
〃
一　ウムドン茹テ壹ロジ〇由右衛門
〃
一　干ウドン三枚　　〇又右衛門
〃
一　五拾疋　此十貳錢　正作
　　五厘　岡碕雅魚
廿九日　　村
一　草駄繕太三足（ゾーリ）　　〇八平
〃　　〃
一　ウドン四枚　　〇伊右衛門
〃　　〃
一　酒肴ニ而ヨバレ　　〇半五郎
〃
一　　政五郎
　　半五郎ノ處ヱ持出
一　ソバキリ　　ニテヨバレ　〇新造
〆拾三名
（２丁オモテ　白紙）
（２丁ウラ）
四月廿九日晴出立、友嘉兵衛政五郎ト半五郎兩人知立迄送ル、政吉八平イトマゴイニ來、五月八日出書状同十六日西一色村久太郎宅ゟ利義持參ス、　右返書　同十九日勇右衛門持參ニ而岡碕郵便エ出ス、　賃廿錢、　同十六日出書状村新造ゟ來、　是ハ書留ニ而、　同廿日出状村海福寺ゟ來、賃不足ト面ニ有シ處不出ニ而着、　右貳通ノ返書六月五日壹書ニ而差出ス、知立郵便江出ス、　金十圓送（ヨク）ル、知立通運會處エ出ス、又眼科約説三、眼科摘要九、四書字引一、〆十三冊、本〆壹包目貳

百五十五匁賃廿錢〇貳毛、金子目方貳匁賃八錢、書状は本ト同包（ツヽミ）内へ入、田村氏緒方氏兩家江禮状出ス、佐賀縣伊藤三彌殿江書状出ス、書留（カキトメ）ニ而賃六錢、

（３丁オモテ）

右政五郎持行、六月廿日知立郵便江勇右衛門持行、神奈川縣（横濱）管一大區小三區野毛山十全醫院分局ニ而利泰方江書状出ス、賃六錢、六月廿八日出書状貳通朝蒼（ママ）氏持來（本月廿日出ヶ廿三日出）、内壹通賃不足ト書面ニ有（アリ）シ處不出シテ着、一東京深川猿江町十三番地伊藤謙吉殿ゟノ返書、六月廿六日認ニ而七月一日着（チヤク）、同二日再返書知立郵便江差出ス、同日利泰方返書并ニ伊藤氏ノ書遣書留ニ而、賃東京行状六錢、横濱行状八錢、貳通郵便使來ニ付頼持行、賃貳錢渡ス、同日佐賀縣ニ而伊藤三彌殿江遣ス状歸ル、八月十三日出状十八日ニ來、返事九月十二日知立郵便江出ス、賃貳錢、十月九日状十五日着ス、同返事十六日ニ知立郵便江出ス、賃貳錢、金十圓差送ル、同通運江出ス、賃八錢也、十一月廿八日認状十二月二日

（３丁ウラ）

病人小山新田清八持參、同返書十二月廿二日知立郵便江出、清四郎持行賃、亥一月一日村由右衛門ゟ來十二月廿二日認、同八日知立通運江出ス、十圓也、使清四郎、賃八錢、二月廿一日出状同廿四日着、同廿二日認状同廿五日着、三月八日状着、四月十三日状出ス并金三十圓送ル、勇右衛門知立郵便局江出ス、金賃十五錢、状賃八錢也

五月廿四日歸宅午前十時頃、同廿九日午後大濱ゟ諸親類廻リ、六月九日歸宅、又十日阿野行、同十一日歸ル、又十三日午後二時ゟ新郷行并ニ太（ママ）平安城、廿日夜歸宅、

（４丁オモテ）

又廿三日名古屋行、同廿七歸ル、廿八日ゟ玄（ゝ）關開業

（４丁ウラ）

〇印ハ二度呉ル印　歸宅見舞

一　温飩貳枚半　八〇早川半七
一　酒壹升　八　加藤久太郎
一　干温飩三枚半　十〇埜々山又造
一　焼麩七十貳　三・足立増七
一　堅焼煎餅壹袋　五〇芥木甚太郎
一　酒壹升　八〇河上小三郎
一　干温飩三枚半　・松浦兼吉
一　酒壹升　八・利兵衛

（５丁オモテ）

一　干温飩四五枚十二・服部勇造
一　温飩貳枚（ゝ）半　一・小出半四郎
一　酒七合　五・足立善三
一　同壹升　八・同　民三
一　菓子袋一　六・埜々山幸八

諸白

一　酒壹升　八・近藤徳造
一　筍壹把　五・酒井慶助
一　焼麩百廿　五・新十
一　同六十六　三・甚左衛門

（５丁ウラ）

新　學校教師
一　酒貳升　十六　朝倉定齋

諸白

一　同壹升　八・石川豊八

同

一　同七合　五六・近藤要造
一　焼麩六十　三・友（カ）四郎
一　諸白酒五合　四　小澤權□郎（ゝゝゝゝゝ）□藏（ゝゝ）・岡田勝四郎
一　山のいも　五・加藤久七
一　ヲコワ貳重　十二・櫻井勘三
一　諸白酒壹升　八〇加藤初二郎
一　同　同　八〇早川半六

（６丁オモテ）

一　同　五合　四・宮田嘉十郎
一　烟草貳卷　五・加藤新五郎

一　干温飩五枚　十・本多泰三
一　酒壹升　八○松浦市三郎
一　中鹽鰺三尾　五○土井伊右衛門
一　焼フ壹盆　三・服部彌平
一　酒壹升　八・松浦常八
一　同　八・同　久四郎
一　同　八・酒井喜三郎
一　同　八○松浦新藏
一　ヲハギ壹キリダメ　十七　木多（ママ）政五郎
　中鰺シホモノ　三
一　ワハギ壹重　十・伴右衛門
　お政
（6丁ウラ）
一　酒壹升　八・權四郎
一　酒五合　四・小澤代吉
一　あじのしほもの五本　七○酒井半五郎
一　酒壹升　八・山本幸三郎
一　同七合　六・池田忠三郎
一　焼麩壹盆　三・酒井市次郎
一　同六十　三・常四郎
一　酒壹升　八・松浦榮次郎
一　同七合　六・境源十郎
（7丁オモテ）
一　鹽中鰺五尾　十・小澤代三郎
一　酒壹升　八・大嶌九介
一　同五合　四・近藤嘉藏
一　同五合　四・小澤權五郎
一　焼麩壹盆　・同　萬造
一　豆腐五丁　三○土井清四郎
一　〃　〃　三○早川新造
一　蕎麦粉一重　・善三郎
一　酒七合　・源太郎
（7丁ウラ）
一　金拾錢　岡碕千鞆
一　同六錢貳厘五毛　・伊平
一　諸白酒七合　・近藤林七
一　同五合　・同　林造
一　同〃　・同　光四郎
一　同〃　・同　松藏
一　〃〃　・同　藤七
一　〃〃　・同　由造
一　〃〃　・酒井角四郎
（8丁オモテ）
一　〃七合　・近藤平六
一　〃壹升　平針弟子
　須賀久吉
一　菓子袋一　・埜々山又四郎
一　温飩一ロジ　○同　由右衛門
一　キリソーメン九わ　友右衛門
一　温飩三牧　三よし
　塚崎太四郎
一　酒壹升　一しき
　植　益補
（8丁ウラ・9丁オモテ・9丁ウラ　白紙）
（裏表紙）
瑤翠亭

解説

前回の「記録（一）」においては、解説を付さなかったため、本稿にて改めて解説を行う。それに際し、書簡翻刻所載の書簡も適宜用いる。手間ではあるが、併せてご参照いただきたい。また本稿所載の「襍費録」や「餞別人名記」、「記録（一）」所載の「襍記」、書簡翻刻所載の書簡類は、みよし市立歴史民俗資料館『秋季特別展　生誕160年記念　みよしの“イ”人　酒井利泰』みよし市立歴史民俗資料館　2013に、一部写真が掲載されている。利泰についての概略は同書所収の拙稿「論考　酒井利泰について」をご参照いただければ幸いである。

「襍記」と「襍費録」は、横浜修業に際する記録である。内容としては、金銭記録と日記に大別できる。日記は疎密がはっきりしており、十全医院入塾までの部分はかなり細かく記されている。それ以降は来客及び十全医院入退塾生の記録、明治８年12月に行った全身解剖の記録が、簡潔に記されているのみである。金銭記録は、支出と貸金、入金の記録にそれぞれ分類しうる。これら金銭記録と日

記のうち、明治８年10月以降の支出記録以外は、全て「襍記」に収められている[2]。

また今回紹介した「餞別人名記」は、利泰が横浜に赴いた際の餞別の記録、福田における横浜の利泰との交信記録及び利泰帰郷時の挨拶記録、利泰帰郷に際する見舞記録である。特に交信記録には、利泰の書簡に記された日付と、福田側が受け取った日付や郵便局名、人名、賃銭などが記されている。ここから書簡②から書簡⑮まで、漏れることなく拾える。この記録に記載されながら、現在のところ所在不明なのは、明治８年６月23日の利泰書簡と６月26日の伊藤謙吉書簡である。また福田からの返書も今のところ全て見当たらない。利泰へ数回行っている送金の記述もあり、それは「襍記」の入金記録と合致する。また「襍記」の日記部や「襍費録」には記されていない、帰郷後の親戚廻りの様子や利泰の医業再開日もこの史料から判明する。出立時の餞別や帰郷時の見舞の各記録には、贈られた品物と贈り主の名が記されている。出立時の餞別に比して、帰郷時に見舞を出した人物と品物が格段に多いことが印象的である。

「襍記」、「襍費録」、「餞別人名記」の交信記録、書簡を合わせ見ると、それぞれが補い合って判明する事柄もある。以下、いくつかの事例を挙げる。

「餞別人名記」の交信記録によれば、書簡③と④の返書を、福田から６月５日に出している。この返書が、横浜の利泰の元へ６月20日に届いたことが書簡⑤に記されている。利泰は書簡③で『眼科摘要』などの書籍13冊の送付を依頼しており、書簡⑤にも書籍送付の督促が記されていたが、その部分はミセケチとなっている。「餞別人名記」の交信記録には、返書と共に書籍13冊を送った旨が記録されており、利泰が書簡⑤を記した後、福田へと出す前に、書籍が手元に届いたことが分かる。

明治８年10月７日、利泰は盗難被害にあった。書簡⑦には、朋友が帰国するため別れの宴会をしている最中に、部屋から衣類などを盗まれた旨が記されている。書簡には朋友の名が記されていないが、「襍費録」に「山本送別」とあり、友人の名が判明する。また夜具も残らず盗まれてしまったため、翌８日に３円で夜具３枚を購入したことも「襍費録」に記されている。

「襍記」の日記部に、明治８年５月25日に真野と共に東京へ行った旨が記されている。同じく「襍記」の支出記録を見ると、蒸気車賃などが記され、東京行が裏付けられる。翌日には田村家を訪問しているが、これも支出記録には「田邨江進物」とある。日記には、６月13日にも東京へ行き、一泊したことが記されている。この際には『理列薬物学』などの書籍や「器械五品」を購入したことが、「襍記」の支出記録から判明する。７月28日にも「打診器」や「洗眼器」、書籍などを購入しているが、これも東京で購入したことが、日記からわかる。

書簡⑮には、十全医院以外の修業先の候補がいくつか挙げられている。その中の一つである大坂病院について、利泰は「当院ニて知己之人」がいるので問合せてみると述べている。日記部を見ると、明治８年９月４日に「彦坂氏大坂江行」とある。この「彦坂氏」が大坂病院にいるという知人であろうか。ちなみにこの「彦坂氏」は、「見聞録」に名の見える「彦坂小七郎」とある人物であろう[3]。

「襍記」の入金記録は、符牒のように記されているが、これも書簡などからある程度解明できる。入金記録は、日付と数字、文字から成り、そのうちの数字が金額を、文字が送金者を示している。送金者の「曲」は曲淵家、「ウ」は福田の酒井家、「井」は伊藤謙吉をそれぞれ表している。曲淵は「襍記」の日記部５月15日の箇所に「金談決定ス」とあり、書簡⑤に「曲淵氏モ廿五圓請取」とあることから、送金者であることが判明する。またこの書簡⑤の文言から、５月27日の「２　10　５」

が25円と推測される。同じ記載方法である７月19日の「３　10　５」は35円、10月３日の「２　10　５」は25円をそれぞれ示していると考えられる。福田からの送金は、「餞別人名記」の交信記録から拾える。日付と金額がほぼ一致するため、「ウ」が福田酒井家であることが確定できる。なお交信記録には、明治９年４月13日に30円を送金した旨が記されているが、それは入金記録には記載されていない。ただ「襍費録」には、４月22日に「眼器械」などで34円93銭の支出記録があり、送金はあったと考えてよいであろう。この送金は、書簡⑤や⑮などで、帰国に際する器械購入資金として依頼していたことに対する送金であろう。書簡⑥には、伊藤謙吉が「毎月七圓五十錢ツヽ」送金する旨を約束したと記されている。「襍記」の入金記録の「井」は、ほぼ一月ごとに送金があり、数字も「７　５」とあることから、これが伊藤からの７円50銭と判断しうる。残りは６月26日の「彐」の「10」である。「10」は10円と考えてよいと思われるが、送金者は不明である。「襍記」の日記部には、明治８年６月26日に「平坂彐内勘七来訪」とあることから、彐は屋号で、そこからの入金と考えられる。

入金された金額を合計すれば、曲淵から115円、福田からは入金記録未記入の30円を含めて60円、彐から10円、伊藤から67円50銭、合計252円50銭の入金を得ている。支出はといえば、虫損や旧貨幣での記述などがあり、はっきりと出し難いが、全て合わせると330円ほどになる。入金が足りないが、これは前述の福田からの30円のように、入金記録に載らない明治９年４月以降に、曲淵や伊藤から入金があったとみてよいであろう。

書簡①で利泰の父利亮は、利泰の修業を２年間で200円ほどと見込んでいる旨を伊藤に伝えているから、その当初の見通しよりも大幅な負担増であったといえる。当初は２年という見込みを、１年１か月で切り上げたのは、書簡などに見られるように、眼科を専門に学びたいという希望がなかなか叶わなかったためである。西洋医学を学ぶ場として、十全医院は最良の修業先であった。しかし十全医院では、眼科の治療は多少行われたようであるが、手術はほとんどなく、眼科医たる利泰は満足できなかった。そこで利泰は、眼科医として著名であったJ.C.ヘボンに師事する。書簡④や⑦などによれば、ヘボンはこの時期、週に１度、土曜日のみ診察を行っていた。「襍記」の支出記録や日記、「襍費録」においては、明治８年９月18日や９月25日、10月23日、11月13日、明治９年４月１日などに、または書簡⑦や⑧、⑭などにヘボンの名が見え、利泰はたびたびヘボンの元へ通い、見学をし、眼科修業をしていたと考えられる。西洋医学全般を十全医院、眼科をヘボンに、それぞれ学ぶことにより、利泰の修業は成り立っていたが、ヘボンが明治９年２月に診療所を閉鎖することにより、本来の目的である眼科修業ができなくなり、眼科専門医への入塾を急いだのであろう。十全医院から転塾し、眼科専門医にて修業したい旨を明治８年10月頃から福田に伝えていたが、明治９年２月になって急に動き出したことは、必然であったといえる。転塾に際し、１か月程度で一通りの修業ができると、利泰は考えていたことが、書簡⑫からわかる。ここからは利泰の眼科医としての実力と自負が読み取れる。

十全医院においては、30人ほどが学んでいたと書簡④などから考えられるが、その中において利泰は、それなりに裕福な存在として認識されていたようである。前述の盗難被害に際して、書簡⑦には自身を含めた塾生の服装についての言及があり、福田に「錦服」を所望している。また、その二白と考えられる書簡⑨の別紙には、衣服を送ってもらうのは、他の塾生の手前、恥ずかしいのでやめてほしいということを記している。また「襍記」には貸金記録もある。これらから考えるに、お

そらくは比較的金銭的に余裕のある人物と見られていたといえよう。

おわりに

３回にわたり、酒井利泰の横浜における西洋医学修業について、書簡や記録を見てきた。最後に、この修業が利泰にとっていかなる意義をもったのかについて言及し、稿を閉じたい。

利泰は大正14年（1925）９月23日73歳で没した。９月26日に執り行われた葬儀の際の西加茂郡医師会長渡辺釟吉による弔辞が残されている[4]。そこには

> （前略）明治八年遠ク笈ヲ負フテ横浜十全病院ニ至リ、米医シモンス氏ニ從ヒ医學ヲ修メ、傍ヘボン氏ノ治療所ニ通學シテ術大ニ進ム、業成テ國ニ歸ルヤ、金鎞刮膜ノ妙手ヲ揮ヒ、門前常ニ市ヲ成シ、遠ク他縣ヨリ來テ治ヲ求ムルモノ亦頗ル多ク、銀海ノ各（ママ）医トシテ声集シ、江湖ニ喧傳ス（後略）

とある。手術の名手、眼科の名医と謳われた利泰の医師としての基礎が、50年前のシモンズとヘボンにあることが再確認されている。元々不安定ともいえる立場であった医師の中で[5]、酒井家は代々眼科の名医として広く患者を集め、治療を行っていた。時代の大きな変化の中で、酒井家は西洋医学摂取へと向かう。何故利泰は、明治８年時点で西洋医学摂取に踏み切ったのか。それについて明確な解答を未だ持ち得ないが、例えば明治７年（1874）に公布された医制の影響なども考えられるのやも知れない。

幕末から明治初期にかけて行われていた英米医学の掉尾を飾るヘボンとシモンズらに学び、その系譜に連なった利泰は、明治８年12月の解剖について、緒方や佐藤、岩佐らの塾生が見学に来たと書簡⑨で述べている。緒方惟準や順天堂の佐藤尚中といった大家に加え、ドイツ医学の採用を図った主要人物である岩佐純の塾生が、アメリカ医学の牙城たる十全医院へ解剖を見学に来ているという事実は、この当時の医学界の未成さ、混沌ぶりを示しているかのようで大変興味深い。

利泰の横浜における西洋医学修業は、近世から近代へと移り変わる歴史の中に、正しく位置づけられよう。このような個別的事例が集積され、大きな歴史的流れが解明される、その一事において、医史学にとっても意味ある行為であったといえる。

本稿を成すにあたって、酒井利彦氏、江﨑順子氏、網岡知子氏に格別のご配慮を賜った。記して謝意を表します。なお酒井利彦氏は平成26年９月にご逝去された。深く衷心より哀悼の意を表すとともに、生前に賜ったご厚恩の数々に謝意を示し、報いるところが少なかったことを心よりお詫び申し上げます。

註

(1)書簡は「眼科医酒井利泰の横浜からの書簡 - 明治８・９年の西洋医学修業に関して -」『愛知大学綜合郷土研究所紀要』第59輯　2014所収（以下、「書簡翻刻」とする）。記録は「眼科医酒井利泰の横浜における記録（一）- 明治８・９年の西洋医学修業に関して -」『愛知大学綜合郷土研究所紀要』第61輯　2016所収（以下、「「記録（一）」」とする）。本稿で書簡翻刻の書簡を用いる場合は、書簡番号をもって示す。

(2)広範な内容を含むため、「襍記」の記述及び構成は少し複雑である。それについては「記録（一）」の「はじめに」に概略を示した。

(3)「見聞録」の該当部は『秋季特別展　生誕160年記念　みよしの“イ”人　酒井利泰』43ページに写真掲載。

(4)新出文書3-176。

(5)医師の立場については、拙稿「村上忠順による紀行『三山日記』と『草分衣日記』について - その成立と意義、そして地域との関わり -」『三河地域史研究』第29号　三河地域史研究会　2016所収に、ごく僅かであるが言及した。